
令和元年度 青少年の体験活動推進企業表彰 〈審査結果〉

【表彰の概要】

文部科学省では、青少年の体験活動の推進を図ることを目的として、「青少年の体験活動推進企業表彰」を実施し、企業が社会貢献活動の一環として実施した優れた実践を広く紹介している。

【審査及び受賞企業決定の流れ】

応募いただいた74企業（大企業：66企業、中小企業：8企業）の中から、審査委員会による審査の上、「審査委員会奨励賞」を決定した。また、特に優れた実践を行った企業を「優秀企業」として決定した。

優秀企業によるプレゼンテーション・最終審査及び表彰式を令和2年2月27日（木曜日）に開催予定であったが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を考慮して中止とし、急遽書面にて最終審査を行った。その結果、最優秀賞である「文部科学大臣賞」、最優秀賞に準ずる「審査委員会優秀賞」を決定した。

【受賞企業】

■文部科学大臣賞（最優秀賞）（2企業・50音順）

- 有限会社エコ・ライス新潟
- 三井物産株式会社

■審査委員会優秀賞（8企業・50音順）

- 大塚製薬株式会社
- 花王株式会社
- 株式会社新興出版社啓林館
- 株式会社ダスキン
- 株式会社ナビタイムジャパン
- 株式会社ファーストリテイリング
- 株式会社ファンケル
- フューチャー株式会社

■審査委員会奨励賞（8企業・50音順）

- アサヒ飲料株式会社
- 株式会社伊勢半本店
- 「震災の経験を次世代に」実行委員会（産経新聞社、積水ハウス、大阪ガス）
- サントリーホールディングス
- 清水建設株式会社
- 日鉄エンジニアリング株式会社
- 日本無線株式会社
- 森ビル株式会社

【審査委員】

- 青羽 章仁 氏（公益社団法人日本PTA全国協議会 常任理事）
- 明石 要一 氏（千葉敬愛短期大学 学長）
- 大本 晋也 氏（国立青少年教育振興機構 理事）
- 笹谷 秀光 氏（CSR/SDGs コンサルタント）
- 茅原 ますみ 氏（株式会社テレビ東京 総務人事局総務部 副部長・CSR推進委員会事務局長）

実際の体験・経験が子どもたちに生き抜く力を付けさせる

全国津々浦々の様々な地域で多くの企業の方々が子どもたちのために、このようなたくさんのアプローチ、各々の会社の特徴を活かした多様な体験の機会を設けていただいていることに本当に感謝の気持ちとともに、とてもありがたい気持ちがあふれた。

日頃私たちが接している子どもたちにとって、このような企業における取組によって仕事をしていく意味や楽しさに触れることができること、さらにそうした機会が日頃はあまり関わるできない職業人としての大人が自分たちのために頑張ってくれていること、そうした



バーチャルではないリアルな触れ合いのある実体験は子どもたちの成長において、とても貴重なことと考える。また、そうした体験の機会がいわゆる大企業だけでなく、地域に密着した中小様々な企業の方々にも取り組んでいただいていることで、子どもたちにとっても身近なところで体験ができるということに非常に感銘を受けている。多様化していくこれからの時代を生きていく子どもたちにとって、職業の選択といういつか訪れる機会に必ずこうした体験が思い出されることだろう。

今回審査委員という機会を頂いたわけだが、特に印象に残るのは、本当に各社の方々が様々なメッセージを事業に込めていただいていることである。

1つの事業の中で伝統や歴史、文化、そうしたものを守り薄めることなく最新技術を取り入れる、そして更にはそれを地域に対する郷土愛にもつなげていく、そうした企画は本当に素晴らしいと感じる。

子どもたちに何を伝え、どのように育っていった欲しいのか、何を感じ取ってもらいたいのか。今後も多くの企業の方たちには、そんな気持ちを持ち続けていただいて子どもたちの活動の機会がこれまで以上に広がることを期待している。

この取り組みに御協力いただいた皆様方には、このような体験活動を通じて子どもたちの健やかな成長を促すような取組を今後も充実され、子どもたちの健全育成に力を貸していただきたく思う。

テーマを絞って入賞した青少年活動

回数を重ねるごとに、参加する企業の質が高まっている。と同時に、「新規参加組」と「常連組」との「差」が気になった。新規参加の方々
「新規参加組」と「常連組」との「差」が気になった。新規参加の方々
にお願ひがある。入賞された企業の報告書をよく読んでいただきたい、
のである。



審査では、目的を多く設定したものでなく、1つに絞ったものを高く
評価した。ねらいが鮮明なものが上位にきている。また、連続して応募した企業では昨年、一昨
年との「変化」の記述に注目して審査した。何が新しい企画であったかにこだわった。

入賞された企業の特徴は、社会が求めるニーズをうまく取り入れている、ことである。例えば、
三井物産の「サス学」アカデミーは新しい学びを提案している。ダスキンや花王もお掃除と手洗
いに絞り学校から歓迎されている。そして、ファンケルも特別支援学校からも支持されている。
ファーストリテイリングも衣服のリサイクルをグローバルの視点で展開している。

中小企業部門では、エコ・ライス新潟が多くの審査委員から高い評価を受けた。昨年より進化
を遂げている。子供たちへの農業体験を幅広く展開している。

今後は、数多く応募された中でなかなか入賞できない企業に対する配慮を考えていく必要があ
りそうだ。

そして、SDGsの視点を企画に取り入れた活動を期待する。

本気・本物の大人との出会いが子供たちの体験を豊かにする

令和元年度にエントリーされた各企業の取組は、どれも創意工夫が素晴らしく、青少年教育の立場から体験活動プログラムを展開している私たちにとっても、とても学びと気づきの多いものであった。

本業で培われた最新のテクノロジーを惜しげもなく投入し、子供たちの「思い」をカタチにする…。そのプロセスを共にすることで、子供たちは企業人として、プロとして仕事と向き合う本物の大人たちの魅力に触れ、将来の生業を思い描く。本表彰の一番の意義がここにあると思う。



その典型例として、大臣表彰に輝いたエコ・ライス新潟の取組は、農業の伝統的手法をロボットなどの最新技術と融合することにより、未来の農業のあり方、可能性を子供たちと共に考えていく構成となっているところが素晴らしい。

農業を産業としてだけでなく、そこに暮らす人々の生活を含む伝統文化として理解することで、「生業」としての農業を理解できるものだと思う。

子供たちが地域に根ざし、SDGs2030の担い手となる為には地域の様々な産業、本気の大人との出会いが不可欠である。

大人たちと様々な活動を共にすることで、子供たちは単なる産業・仕事から「生業」へと理解を深め、持続可能な地域づくりを担い、地域に根ざす自身の「生業」をデザインする大人へと育っていくものであると私は確信する。

そのような学びの場を、今後も様々な企業が学校教育・社会教育と連携・協働して創り上げていくことを願って止まない。

SDGs 経営時代における青少年の体験活動への企業の貢献

本表彰制度は、企業が CSR の一環として行う青少年の体験活動に関する取組を表彰するもので、今年度で7年目となった。その審査基準に特色があり、「教育的工夫と成果」、「本業活用の工夫」、「内容・進行管理」、「情報発信の努力」、「社内理解の醸成」、「新規性・改良点」などの視点で審査している。この中で「本業活用の工夫」が重要である。なぜなら、今や、企業は CSR の具体的貢献として、国連全加盟国 193 か国の合意で 2015 年にできた 2030 年への SDGs（持続可能な開発目標）への対応が喫緊の課題となっており、SDGs では企業の本業により革新を起こすことが期待されているからである。



持続可能な社会づくりの世界共通言語である SDGs では、17 目標の中の目標 4「質の高い教育」が特に重要である。課題が複雑化する世界を変革するには、みんなで学ぶ必要があるからである。SDGs では Society5.0 に向けた未来社会づくり、地方創生と並び、「次世代育成」が最重要課題である。体験活動では、子供たちをどのように育てたいのか、どのような力をつけさせたいかを意識し、そのための教育的観点から企画と運営を行い、支援体制などを検討することが重要である。知識や手段を一方向的に伝えるのではなく、体験を通じて何をどのように学んでもらうのかを工夫することが「質の高い教育」につながる。

私の専門は、SDGs を経営として実践する「SDGs 経営」の推進支援であるが、SDGs 経営を見ていると、対外的な企業価値の向上と社員モチベーション向上の効果がある。今回の受賞事例でもその効果が上がっている。体験活動では、企業の経営陣や社員もその実施を通じて学ぶ効果も大きい。社員のやる気も刺激する。

体験活動のテーマは、「職業・仕事」「科学・技術」「自然・環境」「生活・文化」など多岐にわたっている。本表彰の事例も参考にして、ぜひ、企業は SDGs 経営の一環として次世代育成に取り組み、企業の体験活動推進の輪に広がりを持たせることに貢献して頂きたい。

エントリー企業（最優秀企業以外）への次年度に向けた助言・激励

文部科学省が主催するこの【青少年の体験活動推進企業表彰】に応募された企業のみなさまは、応募された時点で【夢があり、さらなる成長が約束されている企業】だと、感じた。子どもたちへの教育的サポートは、流行でやるものではなく将来を創る子どもたちのために《明確な思い》を持ち続けることが大事だと思うからである。審査をしていて各企業の意味、思いを感じた。



弊社の場合は、この体験活動推進企業表彰に5年間応募し続け、2018年度にはテレビの本物の現場を生体験する《すべての子どももたちに届ける、テレビ東京の校外学習活動》で、文部科学大臣賞を頂くことができた。毎年、賞を狙って頑張ったのではなく（笑）、テレビ東京として、『子どもたちにテレビの本物の現場を見せたい』『本気で大人が働く現場を見せたい』という思いだけでこの校外学習プログラムを続けてきた。プログラムの改良を重ねながら《継続的に》やり続けていることも評価していただいたのだと思う。

また受賞によって、CSR活動がテレビ東京のグループ社員にまで浸透していくことも実感できた。

体験は全てを凌駕してその子の人生を変える。情報が溢れすぎ、いろいろなことを知った気になっている子どもたちが増えている今だからこそ、【実体験】を子どもたちに授けることの重要性を、一人の母親としても感じている。テレビ東京で本物に触れた後『サッカー選手になろうと思ったけれど、カメラマンもいいな！』『アナウンサーになりたくなっちゃった』という子どもたちの声が聞こえてくる。そしてそれを聞いたカメラマンやアナウンサーは、また、自分たちの仕事を頑張ろう！と思う。

青少年の体験活動を支えようとする企業には、夢や愛がある。だからこそ、今後のポイントはやはりSDGsなのではないかと…。今年度の各企業の頑張りを拝見して、この目線で弊社もさらなる努力をと思いを新たにしたい。